

## 近代和風建築を支えた工匠に関する史的研究（梗概）

近江 栄

## 序

本論でいう近代和風建築とは、幕末から明治・大正・昭和戦前期に建てられた和風建築を総称するものである。そこには、伝統的な日本建築の形式をそのままに継承したものから、様々な和洋折衷が図られたもの、さらには洋風建築の中に和風意匠を取り入れたものまで、幅広い内容をもっている。近代和風建築研究は、「近代和風建築」というある特定の固定化された形式の建物のみを対象とするのではなく、その拡がりそのものを研究対象とするものである。いわば、「洋風」に出合ってから「和風」の様々な変容を探ることがその目的であるといえる。

財閥系資本を背景とする建設活動は主に近代洋風建築の観点からのみ論じられることが多い。しかし、財閥の中心にあって活躍してきた人々の邸宅や集会場、そして接客のための施設には伝統的な日本建築を継承した建物も建てられていたのである。さらに、三井の益田孝を中心とする近代数寄者たちの活躍は、古美術のみならず茶室や数寄屋建築にまでわたる幅広い伝統文化再認識の大きな契機となったのである。そうした中において、財閥系の作事にかかわった工匠たちの系譜は近代和風建築研究の重要な一面を担うものであろう。

本論では2人の工匠とひとりの研究家を扱っている。第1章では幕府小普請方の家系を継ぐ人物で、維新後は美術行政の分野において活躍し、また近代数寄者のひとりとして多くの政財界人の邸宅等を手掛けた工匠・柏木貨一郎を取り上げた。柏木は大工棟梁とはいっても、自ら道具を持って作事にあたるのではなく、和風建築に対する鑑識眼を持って施主と職人との間を繋ぐ役割を果たしていた。また、探古齋という号をもつ茶人として知られ、茶道具を初めとする古美術の鑑識に優れた能力をもっていた。いわば、茶人としての美意識を基に工匠としての仕事に従事していた点にその仕事上の特徴があった。そうした柏木と類似した立場にあった人物として仰木魯堂という人物がいる。茶人であり建築の設計を業とし「仰木建築設計事務所」の看板を掲げていた仰木は、自らの立場を“数寄屋建築師”と評している。この章では、柏木貨一郎の経歴を明らかにすると共に、そうした工匠としての特異な性格について考察する。

第2章では藤田財閥に深くかかわっていた大工棟梁・今井平七を取り上げている。幕末から明治大正にかけて活躍した工匠で、数代にわたる大工棟梁の家系にありながら、自らの代に建築業を廃業としたため、現在までその名前はほとんど伝えられることのなかった人物である。今回、今井の残した図面や書類が発見されたことにより、初めてその業績が明らかにされることとなった。第2章は、本研究の中で中心的な位置にあり、発見された資料の整理・分類にその作業の多くをさいている。ここでは、それらの整理された資料に基づいて今井平七の経歴と業績を検討した。

第3章で取り上げた北尾春道は、上記2者とはやや性格を異にする。年代的には大正から昭和にかけて活躍した人物であり、東京高等工業学校を卒業の後、建築の設計家として活躍するが、日本の伝統的建造物、特に数寄屋建築にひかれるようになり、その探求者となる。数寄屋建築に関し多くの著作を出版したことで知られ、新興数寄屋の創設者である吉田五十八とも親しい間柄にあることから、昭和戦前期の建築界における和風世界の動向を知る上で重要な人物である。本章は、北尾春道の経歴と著作を通じての数寄屋建築研究上の位置付けを試みたものである。

第1章 数寄屋建築師・柏木貨一郎<sup>(註1)</sup>

## 1-1 柏木貨一郎の経歴

ここでは、幕末から明治にかけて活躍した大工棟梁・柏木貨一郎の経歴とその工匠としての側面を考察する。柏木には3つの側面がある。ひとつは優れた鑑識眼に基づき古美術の収集と保護に努めた近代数寄者としての面、2つ目は博物館を中心に美術行政にかかわった人物としての面、そして本来の大工棟梁としての側面である。以下、経歴に沿って柏木の人物像を考察したい。

## a, 柏木貨一郎の家系

柏木貨一郎（政矩・探古齋）は、天保12年6月16日、代々加賀藩の用達<sup>ようたし</sup>を努めていた辻又四郎の第六子として、下谷和泉橋通に生まれた。幼名は辨吉。8歳の頃より大澤松濤の門に入り和漢の学を修め、画を鈴木鷺湖に

学び、宗偏流の茶道を身につけた。安政5年に「幕府の大工棟梁」柏木因幡の養子になり、因幡の隠居の後、柏木家第九世を継ぎ若狭と称した。柏木家は「幕府作事方の家系」<sup>(註2)</sup>といわれているが、歴代の幕府作事方の中にその名はなく、小普請方の中に「柏木」姓の幾つかを確認することができる。延宝5年(1677)には、町大工の中から「技術にすぐれた溝口九兵衛・柏木伊兵衛・小林惣兵衛の三名を小普請方棟梁に登用」<sup>(註3)</sup>したといわれ、また、元文5年(1740)の東叡山東照宮の作事に関与した小普請方大工棟梁として柏木日向の名を挙げている文献もある<sup>(註4)</sup>。また、元禄12年正月、幕府が「諸職人肝煎之事」として江戸市中の職人たちを統括する役割として肝煎を定めた折には、大工方の肝煎として任命された中に、柏木周防や柏木土佐といった小普請方定棟梁の名が見いだせるのである。これらの文献に登場してくる「柏木」家こそが貨一郎が継承したものであろうと考えられるが、その系図の流れなどは現時点では不明である。

貨一郎が柏木家第九世を継いだのは慶応4年、つまり徳川幕府が瓦解し、元号も明治と改まった年であった。幕府の崩壊と共に家業を失った柏木は、成島柳北、根岸武香、守田寶丹等と交を結び、古銭の鑑賞や書画骨董、音曲、演戯などを楽しむ生活に明け暮れていたという。そうした中で、日本における博物館創設の功労者、町田久成と知り合い博物館御用掛としての道を歩むことになった。<sup>(註5)</sup>

## b、柏木貨一郎と美術行政

博物館時代の柏木の足跡を『東京国立博物館百年史』<sup>(註6)</sup>等の資料を中心に検討してみると次のような経歴をたどることができる。

・明治4年／4月、大学南校物産局の主催による物産会に出品。同年10月湯島大成殿にて開催予定の博覧会の幹事を担当。

・明治5年／3月10日、湯島聖堂で開催された文部省博物館による最初の博覧会に「雷斧 播磨国極楽寺瓦経并願文 三件」を出品。同年8月、文部省博物館が「大和国等社寺宝物調査、勅封開緘ノ為」に行った古社寺調査に参加。但し、文部大丞の町田久成、文部省六等出仕の内田政雄、そして蜷川式胤の3人が私費を出し合って「古器物写シ方」として雇い入れた形での参加。<sup>(註7)</sup>

・明治8年／この年文部省博物館と博覧会事務局が合併、内務省所轄の東京博物館となる。柏木は内務省十四等出仕「第六局 考証掛」となり、この年に行われた宮内庁と博物館との合同による正倉院宝物調査に参加。

・明治11年／日本美術協会の前身である「龍池会」の創設にかかわる。「龍池会会員姓名表」によれば「號号19番 職任書記 柏木貨一郎」<sup>(註8)</sup>

・明治13年／11月の職員録によれば「博物局(六等属)

柏木貨一郎 東京府平民」

・明治14年／第2回内国勸業博覧会において美術関係の審査員を務める。この後は、明治14年の内務省職員録に「博物局(六等属) 柏木貨一郎 東京平民」の記載があるのみで、明治16年には6月11日付けで「農商務省六等属 柏木貨一郎」の立場で農商務卿西郷従道宛に辞職願がだされている。<sup>(註9)</sup> 町田の尽力により念願の上野博物館新館が開館して直ぐの、明治15年10月19日、町田は突如として博物局長退官の命を受け、運営の第一線から退いた。町田は16年には農商務省御用掛(博物局史傳課長)の任につき、18年には元老院議員となるが22年に突如官職を辞し、仏門に入ってしまうのである。16年の柏木の辞職は町田の博物局長辞任と歩を一にした行動であったと考えられる。

明治の初年より比較的短年月の間に博物館としての基礎を樹立したいわば博物館の草創期は4期に分けて考えることができる<sup>(註10)</sup>。第1期は文部省博物館の時代(明治4年5月から明治6年3月)、第2期は博覧会事務局の時代(明治6年3月から明治8年3月)、第3期は内務省博物館の時代(明治8年3月から明治14年4月)、第4期は農商務省博物館の時代(明治14年4月から明治19年3月)という分類である。

このうちの第1期から第3期までは町田久成が中心となっていた時期である。その町田の傍らにあって、柏木も美術行政、とくに博物館活動の一翼を担っていた。町田の数々の試みの中でも、明治12年の時点で、すでに宝物だけでなく、古社寺そのものも国家の資金で保存すべし、という見解を打ち出していることは注目すべきであろう。そこには、伝統的な日本建築に精通していたといわれる柏木の影響もあったと考えることができる。

この時期の柏木の活動の中で注目すべきこととして、E. S. モースやアーネスト・フェノロサとの交流を挙げることができる。進化論動物学者として知られるモースは海洋生物の調査を目的として明治10年6月18日に来日、偶然の機会から日本の陶磁器の魅力にとりつかれ、蜷川式胤や柏木を師として研究と収集に取り組んでいた。一方、明治17年6月25日から9月中旬まで、フェノロサは文部省調査団の顧問という形で関西調査旅行を行っているが、その時のフェノロサの詳細な調査メモには「オカクラヤカシワギの見解も引用」<sup>(註11)</sup>といった文面も発見されている。この旅行には天心・岡倉覚三、柏木貨一郎、ビゲロー、そしてフェノロサの雇い入れた画家・安藤広近らが参加していた。これが法隆寺夢殿を開扉して秘仏の救世観音像に接したことでも名高い調査である。

## c、近代数寄者としての柏木貨一郎

近代数寄者としての柏木はどんな側面をもっていたの

か。近代茶道史上の貴重な資料である『近世道具移動史』（高橋義雄著、昭和4年、廣文社）の中では「幕府作事方の家系で、最も日本式建築術に通じ、書畫骨董何くれと愛好せぬ者はないが、中にも古筆物大和繪、古器物に對しては特殊の鑑識と執心とを持つ」た人物として評価されている。こうした美術愛好家、あるいは近代数寄者といわれる人々と柏木との交流については、他にも多くの人々によって指摘されている。<sup>(註12)</sup>

例えば、益田孝夫人である益田紫明は、益田孝の実弟である克徳と柏木の交流から、益田孝が徐々に茶の世界に入って行ったことに触れているし、益田孝の収集品の中でも最も良く知られた「源氏物語繪巻」や「地獄草紙」などはいずれも柏木貨一郎を経由して益田の所有に帰したものである。

柏木が、古美術収集を通じての近代数寄者たちとの交流が盛んになるのは明治20年代以降のことである。その中でも、鈍翁・益田孝との交流は柏木にとって重要な意味をもつ。後世に記録されることとなった三井有楽町集會場の設計の仕事は、おそらく益田孝や益田克徳を通じて柏木に委ねられたものと考えられるからである。そして、飛鳥山澁澤邸の設計なども、こうした近代数寄者の人脈の中であって初めて可能であったはずだからである。

博物館運営の第一線から退いた明治15年頃より、死亡する明治31年までの期間が、茶人で古美術の収集家、かつ工匠として活躍した時期である。飛鳥山澁澤邸は柏木の遺作となった作品である。柏木の死因には2つの説がある。明治31年9月6日、根岸の自宅から飛鳥山澁澤邸に向かう途中、「俄に病を發し」<sup>(註13)</sup>たか、あるいは「過って汽車に触れ」<sup>(註14)</sup>たかによって世を去っている。享年58歳、法号を「氣樂坊探古柏園垂空禪士」という。

## 1-2 工匠としての柏木貨一郎

ここでは、柏木の建築作品を通じ、工匠としての側面に焦点を当ててみたい。柏木の作品は設計及び竣工年代の不明のものがほとんどであるが、現時点でその作品と思われるものとして次のようなものが挙げられている。<sup>(註15)</sup>

1) 品川御殿山・益田孝邸及び禪居庵、2) 江戸川端・川田小一郎邸、3) 深川伊勢崎町・岩崎男爵邸、4) 森ヶ崎・大江卓邸、5) 攝州神戸布引・川崎正蔵邸、6) 飛鳥山・澁澤男爵邸及び無心庵、7) 星ヶ岡茶寮・利休庵、8) 内幸町・田中平八郎邸、9) 三井有楽町集會場。

これを見ると、いずれも当時の政財界に活躍する人物の邸宅を手掛けていたことが分かる。この中では、飛鳥山・澁澤男爵邸及び無心庵と三井有楽町集會場の2つの建物に関しては比較的資料が残されていることから、この2つを中心として柏木の作品を考察したい。

## a, 三井有楽町集會場

この建物の建築界への紹介は2つしか確認されていない。ひとつは「数寄風流の家屋」（『建築雑誌』明治27年10月）という記事で、国民新聞より転載されたものである。もうひとつは『明治工業史 建築篇』（工学会編 昭和2年）における紹介で、これらにより完成当初より話題性があり、昭和2年の建築界においても一応の評価を得ていたことが分かる。さらに、これらの資料により、設計者が柏木貨一郎という旧御大工頭であること、2個の大広間と舞踏席及演藝室の設備をもつ御殿風の建物であったこと、そしてその規模などが分かる。（財）三井文庫には、書かれた年代が不明の『有楽町集會場平面図 縮尺式百分の壺』と『有楽町集會場 縮尺三百分之一』という2種類の配置及び平面図と明治31年11月19日に撮影された写真帖『有楽町集會場』が残されている。また、三井不動産(株)には当時の三井合名会社不動産課より提出された数件の議案文書が残されている<sup>(註16)</sup>。この議案文書の中のひとつには100分の1で描かれた「有楽町集會場表書院ノ間平面」が付いており、これにより、先の三井文庫所蔵の平面図とほぼ同様の配置形態が大正4～5年に存在していたことを確認することができる。

敷地は麴町区有楽町3-2（現・千代田区有楽町）で、現在の日比谷三井ビルと三信ビルにまたがる位置である。敷地の東側に正門があり、正門を入ると正面に集會場の新館が位置し、その左手の敷地の南側に本館といわれる建物が建つ。本館は木造入母屋造りで起り破風平屋建ての純日本式の建物で「日本館」と呼ばれていた。一方、新館の方は唐破風に千鳥破風を重ねた豪壮な玄関部を初め、内部のインテリアにおいても和風を主体としているが、椅子・テーブルによる洋風の使われ方に対応したいわゆる和洋折衷の建物であり、それゆえに、当初より「洋館」と呼ばれていた<sup>(註17)</sup>。本稿では、本館を「日本館」、新館を「洋館」と呼ぶこととする。

「日本館」は、大広間をもつ本屋の棟と土蔵を近くにもつ棟（外部へのつながりなどから台所等のサービス機能と考えられる）とが中庭を挟んで東西に走る2本の廊下で結ばれた形となっている。この「日本館」が柏木の設計になるものと思われるが、その全体を柏木が担当したという確証はない。

この集會場は、三井同族の共同利用施設として家憲朗読式を初めとする同族の集會や内外の賓客の接待に使われていたものであり、そのために、舞踏席や演藝席などの機能が含まれていた。上記の平面図からは特にその演舞場の場を確定することはできないが、おそらくは大広間のある本屋にその機能が含まれていたであろう。

さらには、「日本館」の本屋と「洋館」が並び立つ西側の庭園を使つての園遊会なども度々企画されていた。「洋館」の方には椅子やテーブルの配された食堂や応接室、

そしてビリヤード室などもあり、和洋の双方にまたがる様々な接客形式が和洋両館の施設によって工夫されていたのである。

大正8年に三井合名会社に入社した大西儀八の記録によると、「日本館」の大広間には空間を支えるために金物<sup>つが</sup>が使用されており、用材は樫で六寸角大面取りの柱であったというが、大正12年の関東大震災で倒壊し、「南側の柱が数本、内法鴨居で(ボルト締めをしていたため)折れたため、大きな屋根は瓦その侷軒先を地上についていた」<sup>(#18)</sup>という。

#### b. 飛鳥山澁澤邸

飛鳥山澁澤邸は明治12年に澁澤榮一がこの地に別荘を建てたのが始まりであるが、明治33年に増築を加えてからはむしろ本邸としての性格を強め、澁澤が永眠するまで王子邸または暖依村荘と呼ばれ使われていたものである。昭和20年3月14日の空襲による戦災によってその大半は焼失してしまった。

焼失前の澁澤邸は、明治33年以前に建てられていた日本館部分と明治33年に増築された部分、それと接続した洋館部との3つのブロックに分けられる。明治33年12月30日に落成を見た増築工事部分の日本館は、柏木貨一郎の設計によるものであり、柏木の遺作となった建物である。昭和11年11月に(合)清水組(現・清水建設)がまとめた写真帖「暖依村荘」にはこの澁澤邸の写真に平面図及び工事概要とが添えられ、そこに設計者として「日本家 故柏木貨一郎氏 清水店」「西洋館 工学士清水釘吉氏」の名が記されている。

その建坪は「五百七拾壹坪五合五勺五才」で、内訳は「日本家新築 百七拾貳坪貳合八勺四才」「同引立直シ 百四拾六坪九合七勺壹才」「西洋館新築 八拾参坪参合五勺五才」となっている。ここで「引立直シ」とあるのは以前よりあったいわば既存部分を指しており、規模的には新築部と余り大差がない事が分かる。全体は南東に洋館部、北西に和館部と大きく2つに分けられており、かつ和館部はさらに中庭を挟んで二分できる。新築の工事概要の項には「書院」と「餘興場」に関して特に造作や寸法の記載があることから、新築部は洋館に隣接した広間と餘興場を含む部分であると考えられる。平面図で見ると、玄関を入ると応接間と餘興室とが縦に並び、それに直交する形で18畳2間1列型でその左右に入側と縁側をもつ書院が並び、上段及び上々段の間が設けられた形式となっている。

飛鳥山澁澤邸日本館の特徴として興味深い点は、ひとつは広間の大空間に対応するために「松檜混用西洋小屋組」を用いている点、それと餘興場の床下に「五箇ノ大瓶」を置き、音響上の工夫が施されている点などである。その他は、伝統的な日本建築の造りを墨守している。旧

幕時代の御殿風の趣を保ちながらも、演舞場をもつ接客施設として、大勢の人々が集まることに対応する平面構成や技術的工夫が試みられている。

飛鳥山澁澤邸で柏木が担当した和館の建物も、三井有楽町集会場の建物もいずれも餘興場(あるいは演舞場)と広間からなる接客の場であったことは、柏木の仕事を考える上で重要な点を示唆している。邸宅の設計に当たっては、居住部分は勿論であるが、「風流を嗜み、書画骨董の鑑識に長じ、茶香花は勿論、歌舞音曲等も能くした」<sup>(#19)</sup>といわれる柏木にとって接客の場こそが最も得意とするものであったと考えられる。大正期に活躍した美術評論家・壽々木雪山は柏木の作風に触れて次のように書いている。

「以上何れも日本建築の設計にして、是等の中には桂離宮建築の或部分を應用したるものあり、或は醍醐三寶院の建築を模し、又は折衷したるものあり、或は上段曲り床等に特殊の意匠を凝らし、斯て自在に眞行草の様式を適用せり。而して渠の設計を為すや、先ず外観を整理し、高さ、廣さ、棟の取り様、水落ちの工合、庭園との調和までを考へ、内部に在りては客の員数、席の位地、主人及び通ひの便利を図りて、然る後床棚裝飾等に及ぼせり。是を以て其家屋は住み心地よく、使いよく、而かも古實を失はず。故に茶博と雖もまた指をも加ふること能はずと云ふ。」<sup>(#20)</sup>

大正5年に書かれたこの文章は、当時の和風建築に対する評価のひとつを代表するものであろう。そこでは、近代社会での新しい接客形式に対応するため、具体的かつ機能的な意味での使いよさを追及し、その上で「古実」を失わない伝統的作風を継承しつつ、格式をいかに維持しているかが和風建築評価の大きなポイントとなっていたのである。

#### 1-3 数寄屋建築師-柏木貨一郎と仰木魯堂

柏木貨一郎は、徳川幕府の小普請方の家系を継いだ人物であるが、自ら道具を持って作事にあたるのではなく、あくまで大工を初めとする多くの職人を統合する役割を担っていた大工棟梁であった。柏木が常に助手とした門下の工人として福田吉五郎(住宅)、木村清兵衛(数寄屋)、西村彦右衛門(瓦師)、池田某(泥工)、松本幾次郎(庭園)といった人々の名が挙げられている<sup>(#21)</sup>。この中で、木村清兵衛は「私は京都の者で御座いますが、亡くなられた柏木貨一郎さんの御存命中に、父の清工と共に上京いたしまして、柏木先生の御引立を蒙りました。柏木先生がお亡くなりなされた後、一度が京都へ帰りましたが、再び出京いたしまして、其儘留まって今日に至って居ります(大正3年10月談)」<sup>(#22)</sup>と語っている。このことから、京都出身の数寄屋大工で後に関東において活躍したことで知られる木村清兵衛が父子二代にわたり柏木の

恩顧を受けていたこと、また、関西と関東との間の工匠や技術の流通に柏木が一役買っていたことなどが分かる。

もうひとつ、柏木を理解する上で重要な点は、茶道具や古美術等に対し優れた鑑識眼を持った茶人であった、ということである。自らが数寄者であり、かつ工匠でもあるという立場を生きた工匠・仰木魯堂は自らを“数寄屋建築師”と称していたが、その“数寄屋建築師”の先輩として柏木貨一郎の存在を強く意識していた<sup>(註23)</sup>

仰木魯堂は柏木貨一郎と同様に茶人であり、茶道具や古美術、そして庭園や建築に対する優れた鑑識眼を持つ工匠として、益田孝を中心とする近代数寄者たちの中で活躍した。特に益田の後を継いで三井の経営陣の中心となった団琢磨に認められ、「団家の普請奉行」とまで評されていた人物である。

柏木と仰木に共通しているのは、工匠としての仕事において、茶の美意識を基本としていた点にある。明治・大正期にかけてのいわゆる近代数寄者たちは、仏像、古経巻、絵巻物、古筆類、土佐絵などの膨大な量の古美術を茶に取り入れた。それらは、かつては茶とは無縁であった美術類であった。そのために「それらの膨大な古美術と茶道具とを、同時に演出し賞玩する必要から、数寄屋建築の構造に変化が望まれたのであります。—中略—それまでの草庵の厳しさをゆるめるとともに、華麗で派手に過ぎる数寄屋に侘びを帯びさせるといった手法で、開放的気風の茶人の心を魅了した」<sup>(註24)</sup>という。

このように、新しい時代の住まいを模索する中で、茶室の様式を住宅建築に応用することに仰木や柏木の特徴があったのである。見識のある近代数寄者の中には職人たちを指図して自ら茶室や庭園・露地を設計する者もいたが、多くはそうした鑑識眼のある工匠にそれを委ねていた。そこに、自らが茶人で数寄者でもあった工匠、いわゆる数寄屋建築師の役割があったものと考えられる。

## 第2章 財閥の工匠・今井平七

### 2-1 大工棟梁・今井平七の経歴

明治から大正にかけて関西を中心に活躍した工匠のひとりに今井平七という人物がいる。代々棟梁を務めた家柄であると伝えられているが、平七の代に建築関係の職業から身をひいてしまったため、その名は建築界にほとんど伝えられていない。今回、今井の残した図面や資料が発見されたことにより、その業績の一端が初めて明らかにされることとなった。<sup>(註25)</sup>

今井の経歴の中でも特に、東京皇居御造営とのかかわり、(有)日本土木会社との関係、そして関西における新興財閥の雄であった藤田財閥及び藤田家との結び付きなど、その足跡は近代の和風建築の世界を知る上で重要な

位置を占めるものと考えられる。

今井の経歴を知る上での資料としては、『京都御大札記念』の写真帖と今井自身が明治35年に書き記した『履歴書』の2つがある。写真帖は、京都で行われた御大札記念行事に出席する華族・貴族の人々の仮宿舎として提供された邸宅を紹介した一種の記念アルバムで、おそらく関係者のみに配布されたものであろう。『履歴書』には、身上に関する記述はなく、主な仕事と規模、請負金額が明記されたものである。この2つの資料に基づき今井の経歴をたどってみる。今井は弘化3年名古屋の生れで「代々尾張藩の棟梁たりしが氏は其三代目」といわれ、明治の初年、23歳の時に名古屋より京都に移ったとある。京都に移ってから大正12年頃までの今井の活躍は、大きく4期に分けることができる。

【第1期】は明治初年より明治17年までで、京都において社寺の建設等にかかわっていた時期である。「宮内庁内匠寮京都皇居御修繕工事」(明治10年、以下( )内はいずれも施工年を指す)、「西本願寺太経校北生徒寮その他新築工事」(明治14年)、「大仏豊国神社本社殿その他新築工事」(明治14年)、「京都泉山泉涌寺御位牌殿および唐門その他新築工事」(明治16年)、「京都主殿寮修繕工事」(明治17年10月)などの仕事に関与している。

【第2期】は明治17年より明治21年までの期間で、東京皇居御造営の拝命を受けて東京で活躍した時期である。「内賢所神殿皇霊殿神嘉殿」(明治19年)と「内謁見所および宮御殿侍従長詰所女官部屋御廐その他新築工事」(明治21年)を担当したという。

【第3期】は(有)日本土木会社時代である。(有)日本土木会社とは、明治20年に設立された我が国最初の法人建設企業として、当時最大規模を誇っていた会社であり、実質的には関東の大倉組と関西の藤田組とのそれぞれの建設部門が併合したものであった。明治25年には日本土木会社は解散することになるが、わずか5年8カ月の間に手掛けた主な工事だけでも105件を数えたといわれる。<sup>(註26)</sup>

日本土木会社がかかわった建築工事の中でも注目すべきものに皇居造営がある。これは明治17年以来大倉組商会在が施工を担当してきたが、20年よりは日本土木会社が継承したものである。皇居造営は、4つのブロックに分けて行われていた。第1部奥宮殿と第2部表宮殿という木造部分を統括していたのは宮内庁内匠寮の木子清敬、第3部の内庁舎は新家孝正、第4部の土木工事・橋梁は久米民之助が統括していた。このうち、新家孝正と久米民之助の2人は皇居造営工事の終了の後、日本土木会社に入社している。さらに大工棟梁のレベルでの人材登用も含め、この工事を通して多くの人材が日本土木に流入している。

京都を中心に社寺の新築・改築の工事に携わっていた

今井平七は、皇居造営の仕事に勧誘され、さらに日本土木会社へとその職を転じていったと思われる。人的にも物的にも明治期の建設業界に多大な影響を与えた(有)日本土木会社であったが、明治23年の会計法の公布等を直接の契機として、明治25年の株主総会で解散を協議、賛成の可決を得ている。明治26年7月の解散時において、日本土木会社は東京本社、大阪支社の他に、全国主要都市14カ所に出張所を置いていたが、今井平七は明治21年には和歌山出張所、22年には熊本出張所において共に「五等技師 四十円」の待遇で働いていたことを『(有)日本土木会社 職員録』によって知ることができる。今井の残した図面の中に明治23年5月2日付けの「熊本騎兵営新築」の図面の一部があることから、熊本では軍関係の施設の建設にかかわっていたものと考えられる。つまり、日本土木会社の出張所での仕事は、決して伝統的な形式の建造物に限られたものではなく洋風の建物も手掛けていたことになる。一方の、和歌山出張所での仕事に関する資料はひとつも残されていない。

【第4期】は明治25年から大正12年頃までで、(有)日本土木会社の解散に伴い独立し、京都にて土木建築請負業を自営していた時期である。この時期には、(有)日本土木会社以来の付き合いから藤田財閥とかかわりを持ち(株)藤田組及び藤田家の邸宅、別荘などの仕事に従事していた。藤田家との関係は、明治43年3月30日に藤田傳三郎が亡くなってからも続いている。傳三郎亡き後は、新たに藤田財閥の当主となった藤田平太郎の依頼により、「箱根小涌谷新築別荘」や「東京椿山荘藤田別邸」などの建物を手掛けている。今井の残した図面及び書類から、「箱根小涌谷新築別邸」の方は大正7年頃、「東京椿山荘藤田別邸」の方は第2期工事まで含めると大正8年～大正11年頃にかけての建設であったと思われる。前者の方は現在も一部が小涌園ホテル内の「貴賓館」として残されているが、後者の方は既に取り壊されている。

この時期には、「宮内庁内匠寮京都二条離宮御殿改築移転その他工事」(明治25年)、「大阪市北区網島町藤田傳三郎居室新築工事」(明治29年)といった和風の建物だけでなく、洋風建築や工場建築などの設計も行っている。「三菱合資会社大阪支店銀行部新築工事」(明治30年)、「三菱合資会社大阪支店新築及び社宅その他工事」(明治33年)、「兵庫県加古郡高砂町合資会社神戸製紙所新築工事」(明治33年)、「兵庫県加古郡高砂町合資会社神戸製紙所社宅新築工事」(明治34年)、「神戸市相生橋警察署廳舎及付属家新築工事」(明治35年)などがそうである。

今井の『履歴書』によると、明治30年頃を境としてその仕事内容に洋風建築や工場などが増えてきていることが分かる。それは、藤田網島邸のような特殊な例を除くと、時代的にも今井の技量を生かし得るような木造和風建築の需要が急激に失われつつあったためであろう。ま

た、今井自身も新しい時代に対応した新しい建築課題に積極的に取り組んでいたことを示している。

今井の晩年はどうであったのか。今井には2人の息子がおり、共に海外留学をさせているが、そのどちらにも建築の仕事を経がせてはいない。今井の家より「土木建築請負業」の看板がいつ頃外されたかは定かではない。残された図面より判断すると、大正12年の「江塚博士本宅新築」が最後で、個人的な仕事としては「京都柳馬場二条南入」に建てた今井の別邸が最後となっている。この辺りが今井と建築とのかかわりの最後の時期であった。その後は自宅に「日本映画配給合名会社大阪支店」の看板をあげ、息子共々映画興業の世界にあったという。

## 2-2 今井平七の仕事について

藤田財閥の創設者である藤田傳三郎は関西を代表する近代数寄者としても知られている。古美術や茶道具の収集に関しては当代随一と評された人物であると共に普請道楽としても知られ、大阪網島の一带に宏大な邸宅群を構えていた。その作事を中心的に行っていたのが今井平七である。藤田傳三郎の営んだ網島の邸宅群は、藤田財閥にとっての重要な接客施設としての性格をもっていた。また、建築、造園が一体となった茶の湯の場を形成しており、茶道具類の収集と展示、保管のための施設という役割も担っていたのである。ここでは第2次大戦の大阪空襲によりその大半を焼失してしまった網島藤田邸の概要を検討することで今井の仕事进行を考察する。

### a. 藤田網島邸

藤田家では、明治から大正・昭和戦前期にかけ、網島(現在の都島区網島町)一带に壮大な邸宅を構えていた。藤田傳三郎が網島に居を構えたのは明治半ばといわれている。今井平七の『履歴書』によると、「大阪市北区網島町藤田傳三郎居室新築工事」を明治26年4月1日に着手し、29年4月30日竣工したとの記録がある。40年代に入ると、ここに「新本邸」(新築か増築かは不明)と「東邸」が建てられ、さらに「西邸」を加えた3つの邸宅群によって構成されていた。

網島に建てられていた邸宅は、今井の図面上では「新本邸」「東邸」「別邸」の3種類の名が用いられている。「新本邸」とは、明治29年4月に竣工した本邸に対しての言い方であろう。「新本邸」の建設の時期は、図面に記された年代からおおよそ明治43年頃で、現存する「東邸」の建物とほとんど同時期に建設が進められていた。そのためか、両者は外観意匠を初めとして非常に似通った構成をもっている。

「新本邸」と「東邸」に対し、「別邸」(あるいは「網島御別邸」)と呼ばれた年代不明の建物の図面がある。これは他の2つと比較するとかなり異なっており、洋風の

玄関や洋風応接室をもつ建物の後方に和館を接続させたような構成をもっている。この建物が「西邸」と呼ばれた建物であったと推測できるが、現時点で確証はない。

#### b, (新) 本邸

新本邸の遺構として現存しているのは、表門と日比忠彦設計による倉庫1棟のみである。当時の本邸の概要を知る上で、藤田美術館所蔵の略平面図が参考となるが、建設当初の図面ではなく、いつどんな目的で描かれたものなのかも不明である。藤田傳三郎の側近にあって秘書を務めていた坂井隆三氏の回想によれば、「其本邸の建坪は実に式千坪にして、当時に於ける我国最大の日本式住宅にして、其建築様式は有識風・総桧造りにて、他に三階建鉄筋コンクリート建倉庫二棟あり、其内一棟は現在藤田美術館の重要美術品を収蔵保管する重要倉庫なり。又別に古来より現在迄に至る我国伝来の茶席四十席ありたり。而して之等建築全部の形容・規模・構造・手法はよく調和し、実に大大阪の北辺に偉観を呈し」<sup>(註27)</sup>ていたといわれる。

全体の構成はロ字型の配置を持ち、そこからさらに延びる翼状の廊下に各部屋が取り付く形となつている。唐破風の車寄せをもつ本玄関とその脇の玄関を中心とすると、左手のゾーンが接客用、右手のゾーンに主人・夫人室が並び、その奥手に台所、食堂、女中室などのサービスのゾーンがある。ロの字の中央の中庭部分に玉突き室（ビリヤード室）が独立して置かれている。

接客ゾーンは、玄関を入れて左手に洋風応接間が3室並んだ構成で、さらにその奥には3室1列型の座敷で、その両側に入側と縁側とが付いた書院棟が続く。外部に広いバルコニーをもつ洋風応接間と書院棟とを直交させ配置する形式は現存する「東邸（淀川邸）」と同様である。さらに、書院棟の先には幾つかの小間を中心とした茶席から構成される棟がつながっているが、このような洋風応接室、3室1列型の書院、茶室などを組み合わせた接客構えは「東邸」と極めて類似しており、藤田家における接客形式の在り方を反映したものであったと考えられる。「東邸」と比べると全体の規模がさらに大きく、接客用にまとめられた茶席とは別に、主人棟の近くにも茶室が点在しており、敷地内に40近い茶室をもっていたといわれる藤田傳三郎の茶道への傾倒ぶりをよく示している。

立面は社寺建築を思わせるような豪放な構えを見せ、入母屋の屋根を起りと照りとの組み合わせによって、全体の調和を整えようとしていたことがよく分かる。立面にはガラス戸が多用され、明治宮殿を思わせる意匠上の和洋折衷技法の一端を見せている。

#### c, 東邸（現・太閤園「淀川邸」）

現存する東邸は藤田傳三郎が、次男で分家した徳次郎のために建てたものである。『淀川邸記』（私家版、昭和33年2月）には建設にかかわった人物としては「京都市上京区今出川 棟梁 今井平七」を筆頭に「佐藤欽三郎、高木平次郎、外二人」の名が挙げられている。

敷地は本邸に隣接する6707余坪、建物面積844余坪の大きさを持つ。明治42年頃より用地買収を行い、43年頃より宅地造成工事に着手している。これらの土木工事は京都帝国大学教授の日比忠彦を顧問に、井上敬太、三村福一、三宅平太の3人が、先述した本邸のRC造の倉庫共々、担当したものである。建築に着手したのは明治44年で大正3年に竣工、造園まで完成したのは大正4年である。藤田傳三郎は明治45年3月30日に永眠しているため、東邸に関しては完成した姿を目にしていない。

建物母屋は「玄関棟、応接食堂棟、客間棟、主人間棟（二階建）、台所棟（二階建）等方形に建ち並び廊下により連絡し中庭には玉突き室棟、台所庫（三階建）、外庭に重要庫（三階建）及小児間棟並に付属屋棟を配置し、茶席は玄関の横より廊下にて連絡し残月間、大炉間、萩家等三席及付属待合、水屋、配膳間を建築し中庭には客間付属茶席、水屋等配置」<sup>(註28)</sup>したものである。この平面形式はほぼ現在もそのままに残されているが、玉突き室、台所、小児間棟並びに付属屋棟の部分は大幅に改変させられている。鉄筋コンクリート造3階建の重要庫も内部は改変されている。

全体に接客を主体とした建築的構成となっており、それぞれ15畳の3室が1列に並び、両側に入側と板の間の付いた書院風の客間は一部の畳を取り外すことで能舞台及び橋懸かりとして使用できるように作られている。接客の形式として広間に能舞台と数寄屋（茶室）とを組み合わせた形式は、近世の書院造りを継承するものであり、加えて和洋折衷の応接間とテラスとを組み合わせている点は近代の新しい接客形式として取り入れたものであろう。

また、客間、応接室、食堂のそれぞれの天井に付けられた電灯施設は、昼間は巻き上げられて格天井の中に収まり、使用時には別室の操作室により巻き降ろす工夫がされていたり、手洗いもすべて水洗式となっている。いわば伝統的な形式の中に近代的な設備を積極的に取り入れたものといえよう。その外観意匠においては、照り屋根入母屋造り（玄関棟、応接食堂棟、客間棟）と起り屋根入母屋造り千鳥破風瓦葺（主人間）とを組み合わせ、豪放さを演出し、かつ全体の調和を整えている点は本邸と同様である。

#### d, 藤田網島邸の特徴

現存する東邸と新本邸とを中心として藤田邸の概要を検討してきたが、そこには次のような特徴が見受けられ

る。1) 唐破風の車寄せを持ち、中庭を囲む口の字型の配置を取っている。2) 接客形式として、3室1列型の書院を中心とし、洋風応接間や茶室などが設けられている。3) 主人室を初めとする私室には数寄屋風の手法が加味されている。4) 新しい設備機器(水洗トイレや電灯など)が積極的に導入されている、といった点が挙げられる。

今井平七は藤田傳三郎の信任のもとに藤田関係の工事を数多く手掛けていた。邸宅の建設に当たって普請道楽でもあった藤田傳三郎は「余暇ある毎に翁自ら其寸尺を携え、形状色調等一枚の戸・障子・唐紙・押入に至るまで翁が自らの工夫考慮に出て、技術者・棟梁・工人を集め翁は一々膝を交へて命令し評議決定造出せし」<sup>(註29)</sup>のものであった、と側近にあった人物は回顧している。

そこには、近代数寄者として独自の価値観と鑑識眼とを有していた施主と、それに技術的にこたえる工匠、という関係が成立していたと思われる。

### 第3章 数寄屋研究家・北尾春道

昭和初頭、近代数寄屋建築の創成期とほぼ同時期、数寄屋建築に関する数多くの著作が北尾春道によって出版された。しかも、それらの著作の多くは過去の遺物となることなく今日もなお数寄屋を理解する上での貴重な文献としてひろく読まれている。こうした数寄屋建築の研究と啓蒙に果たした役割にもかかわらず、北尾春道については従来ほとんど論及されることがなかった。本章は北尾春道の経歴と、著作物を中心に、その業績について考察を試みるものである。

#### 3-1 北尾春道の経歴<sup>(註30)</sup>

北尾春道は、明治29年12月1日、大阪府南河内郡北八下村に北尾吉郎兵衛の四男として生まれた。幼名は春吉、明治37年に春道と名を改めている。父吉郎兵衛は寺院建築等の建設に携わっていた人物といわれるが、明治38年には僧侶となり浄郭と改名、本願寺門跡であったため、春道も明治37年9歳にして本願寺の衆徒となっている。

北尾は建築家への道を志し東京高等工業学校(現在の東京工業大学)にて建築を学んだ、といわれる。東京高等工業時代においては東京帝国大学教授であり講師として同校に出講していた伊東忠太に出会い、卒業後も伊東のもとで建築設計の手伝いをするなど、生涯にわたり師弟関係にあり、伊東のヨーロッパ旅行に同行したこともある。その後は、伊東を介してであろうが大熊喜邦にも師事している。北尾は後に膨大な著作を発表するが、それらはすべて春道自身による実地調査に裏付けられたものである。このごく短期間に膨大な数と質の高い調査を行うための基礎的な知識や素養は、当時数多くの民家調

査を行っていた大熊に師事することで身につけたものであろう。

昭和元年30歳にして独立し、大正12年東京駅前に完成した丸ビル内に設計事務所を構えている。この時、後に近代数寄屋を生み出す吉田五十八もまた同ビル内に事務所を構えたことから2人は親しい間柄となり、2歳年上の吉田とは、建築上の問題はもとより一身上の相談までをする仲となり、吉田は北尾の御息女の仲人をも引き受けている。

昭和の初めには鎌倉に自邸を建て、事務所もそこへ移転し、鎌倉を中心に住宅、幼稚園、教会といった幾つかの建築設計に携わっている。鶴岡八幡宮の二の鳥居と三の鳥居も当時の北尾の作品のひとつであるが、鳥居を鉄筋コンクリートで建てることに関して、当時の世評は非難轟々であったという。

昭和11年、彼の建築作品における代表作である京都西本願寺内に建つ貫主の私邸・錦華寮の建設にとりかかる。どのような経緯で錦華寮の設計が北尾に任されるようになったのかは不明であるが、本願寺とは近い間柄にあった伊東忠太の推薦という可能性も考えられる。この錦華寮建設をひとつの契機として、北尾は度々京都に足を運び、昭和11年から昭和13年にかけて数寄屋建築の調査、研究に没頭した。これと時期を同じくして北尾の代表的著作である『数寄屋聚成』(全20巻)が昭和10~12年にかけて、また『国宝書院図聚』(全10巻)が昭和13~14年にかけて出版されている。茶は織部流をたしなみ、古田織部に強くひかれ織部に関する研究にも熱心であったという。交友関係としては、吉田の他に堀口捨巳や美術評論で名高い森口多里などとも親交があった。

錦華寮の建設が一段落すると、陶芸家の加藤唐九郎と共に北尾は昭和17年から上海、北京など数カ月にわたる建築行脚の旅を繰り返し、いったんは帰国するが、第2次世界大戦の勃発を見てシンガポールに渡る。大戦中は海軍の施設部に所属し、シンガポールに本拠地を置いて、軍の格納庫や慰霊塔、軍人の住宅に至るまで様々なものを手掛けたようである。昭和17年にシンガポールに渡ってから4年後の昭和21年に帰国した後は、専ら調査研究と著作活動に専念するようになる。

昭和47年9月1日に脳軟化によって76歳で他界するが、その2~3年前まで著作活動を続けていた。その著作数は40冊を超え、そのほとんどが数寄屋に関するものであった。

#### 3-2 北尾春道の著作とその業績

北尾春道の著作物は出版された年代を検討してみると、昭和10年前後(前期)と昭和30年頃以降(後期)の2つの限られた時期に集中して著されていることが分かる<sup>(註31)</sup>。以下、単行本の出版に先駆けて雑誌に発表された

北尾の論文からその建築観を考察し、次に刊行された著作を2つに時期に分けて内容の考察を行う。

a, 発表論文について

昭和7～9年にかけて、北尾は雑誌『建築世界』に次のような論文を発表している。

- 1) 「新興佛寺建築の様式に対する一考察 (一)」  
第26-2 (昭和7年)  
「新興佛寺建築の様式に対する一考察 (二)」  
第26-4 (昭和7年)
- 2) 「慈雲尊者史蹟雙龍庵禪那臺の建築考」  
第26-12 (昭和7年)
- 3) 「近代日本住宅に於ける室内構成の新傾向に就いて」  
第28-2 (昭和9年)
- 4) 「新しく発見されたる岩手県下閉伊郡に分布する大理石の調査に就いて」 第28-3 (昭和9年)
- 5) 「近代数寄屋建築の展望」 第28-4 (昭和9年)

これらの論文は、北尾の膨大な著作物が刊行される以前のものであり、以後の著作の原点ともいべき姿勢の幾つかをそこに読み取ることができる。特に1)と3)と5)の論文は北尾の建築観を知る上で重要である。

1)の連載論文は新築される仏寺建築においても古来伝来の形式が踏襲されるべきかどうかを論じたものである。ここでは 仏寺建築の流れを概観した上で、「将来の新興佛寺建築は、断じて様式模倣ではなくして信仰的精神と教化精義の根本的革新のもとに案出せらるべき」として、様式に束縛されない純粹理念に基づいた建築の提案を唱えている。

北尾は2年後の昭和9年、より具体的内容を伴った論文「近代日本住宅に於ける室内構成の新傾向に就いて」を発表する。ここでも様式主義の盲従的傾向を批判した上で、近代化の名のもとにおける居住空間の「単純化、原始化等の課題も稍もすれば住宅の本質的な精神を忘れてしまう」とし、その本質的「居住住宅の精神はすなわち趣味の展開であり、室内構成に趣味の美が忘れられては、主なきアパートの一隅と同じである」と述べている。ここで北尾がいう「趣味の美」とは末梢的な「単なる個人趣味でなくして、近代日本の趣味」であり、この「趣味の美」をいかにして室内構成の全般として取り扱っていくかが、今後の日本住宅の室内における課題としている。そして、天井、壁、床、建具等といった具体的項目についてそれぞれ材料とデザインといった観点から日本における近代趣味の可能性を論じている。

昭和9年4月の『建築世界』誌は北尾春道監修による「数寄屋建築特輯号」として刊行された。この号には北尾自身の書いた「近代数寄屋建築の展望」も掲載され、北尾の建築観が、ここでは「数寄屋」という具体的対象を得ることでより明確に語られている。「数寄屋」とは我

が国固有の趣味と民族精神を踏まえた上での自由な理念に基づき、様々なデザイン的な模索や提案が繰り返されてきたものであるとする認識は、そこに流れる精神性と共に北尾の建築理念と合致するものであった。

b, 前期 (昭和10年前後) の著作物について

昭和8年頃より、北尾春道によって『数寄屋聚成』を初めとする幾つかの著作物が刊行された。そこに紹介された建築は自らの実地調査に基づくものが主であり、その総数は数百にのぼる。その数もさることながら、各調査自体も建築物について実測に基づく平面図・立面図・展開図等の図面類、内観・外観透視図、全体から詳細部に至る各種写真など密度の高いものとなっている。ここではまず前期における実地調査の集大成であり、北尾の代表的著作である『数寄屋聚成』(全20巻)について考察を行う。

『数寄屋聚成』はその刊行の目的として、「一般人」「設計者」「海外」のそれぞれに対する姿勢が打ち出されている点にひとつの特徴がある。一般人に対する啓蒙という点はさておき、設計者に対しては、数寄屋の実物を体験することの難しさを語った上で「この数寄屋聚成を見れば、これら従来への遺憾を一掃し、実物同然の数寄屋を座右に置いて、仔細にこれを講究する事を得る訳で、その便宜は固より同日の論に非ず。」としている。また、海外に対しては解説に英和両文を用いるという配慮を行っている。全20巻の内容は、その記述方法によって次の2種類に分類できる。

・ひとつは、建物全体を紹介する。

ひとつの建物を幾つかの写真を中心に紹介したもので、すべての建物に対して、創建年代・様式・好・席、そして自らの実測に基づく平面図と簡単な沿革を述べている。また、建物の特徴を伝える数枚の写真と共にそれについてのコメントを付けている。『数寄屋建築史図聚』、『数寄屋名席聚』、『近代数寄屋名席聚』、『数寄屋住宅聚』がこの形式を採っている。

・もうひとつは、部分を紹介する。

建物をある部分に分解し紹介するもの。例えば、開口ならば、最初にその一般的概要、発生理由に触れ、次に寸法などを述べた上で、様々なタイプのもを写真によって紹介し、それにコメントを付けている。『数寄屋名園聚』、『数寄屋建築構造聚』がこの形式を採っている。

また、著作全体に共通する特徴としては1)写真の多用、2)コメント文、3)寸法の簡略化、4)近代を意識した記述、といった点を挙げることができる。1)の写真の多用に関しては、当初は図面と写真によって解説するはずであったが、写真が「相当の製図的效果を充分に現わし得ている」こと、また図面・写真両者の交錯の繁雑を避けることから、写真を中心に編纂したとしてい

る。図面ではなく、写真を中心に紹介することは、図面に表せない銘木奇木を使い独特の雰囲気をつくり出す数寄屋の紹介において画期的なものであった。

2) のコメント文は、ほとんどすべての写真に添えられている。写真におさめられた材の寸法、仕上げ等を記した後、それがどのような雰囲気を与えるものかといった一文を添えている。3) の寸法の簡略化については、前述のようにコメント文の中で記述されているだけで、図面も平面図のみである。4) コメント文においては「近代」を意識した文章を数多く見ることができる。「近代味をもつ茶亭として好範」といった記述が多く、数寄屋建築と近代建築との親近性を誇示している点は、北尾の近代への強い志向を感じとることができる。また図聚の中に掲載されている透視図も、通常展開図や起こし絵による空間表現とは異なった、「近代」味を感じさせるものひとつであろう。

以上のことから、『数寄屋聚成』とは単に数寄屋という過去の遺構を紹介したのではなく、「近代」を多分に意識し、新しい建築をつくる上での一種の手引き書として位置付けられていたことが分かる。

c, 前期（昭和10年前後）におけるその他の著作物について

『数寄屋聚成』が完結した後『国宝書院図聚』（全10巻）が昭和14～15年にわたって刊行されている。一見『数寄屋聚成』の姉妹版にも見えるこの『国宝書院図聚』とはどのような性格のものであったか。建築の紹介方法において、『数寄屋聚成』が写真を多用して図面が少なかったのに対し、『国宝書院図聚』では図面の量がはるかに多い。これは北尾自身の数寄屋と書院それぞれの建築について伝えようとする事項の差異を物語っているといえる。

北尾にとって書院建築とは「様式」の上に成立している建築であり、数寄屋建築とは「様式」に束縛されない建築であった。北尾は書院建築の紹介においては、その最も重要である「様式」を伝えるために図面をその中心としたのである。一方、数寄屋建築の紹介においては、「雰囲気」つまり、設計者のどのような意図のもとにいかなる空間が体现されているかを伝えるため写真が多用されたものと思われる。

北尾は『国宝書院図聚』の冒頭で、「本図聚は日本住宅建築の基調をなす書院造に関する総合的研究を意図」したものであるとし、書院建築理解の必要性を、現在の日本住宅を認識する立場から訴えている。また昭和31年に出版された『書院建築詳細図譜』では、住宅建築における書院建築の影響を世に知らしめることを課題としている。にもかかわらず書院建築は、その様式に依存する性格から北尾の著作対象としては魅力を欠くものであったようである。それ以降の北尾の著作はほとんど数寄屋建

築に関連するもののみで、書院建築に関しての著作はほとんど見ることができない。

この時期のものとしては他に『近代趣味の床の間図聚』（昭和8年）と『近代数寄屋住宅設計資料』（昭和9年）の2つがある。共に『数寄屋聚成』以前に書かれ、「近代」という言葉が表題に用いられているが、その性格は全く異なる。前者は北尾自身による床の間のスケッチを26例掲載したいわば習作集というべきものである。これに対し、後者は現存する数寄屋住宅で近代味を感じさせるものを北尾が選び出し紹介したものである。自らの設計による事例を掲載した『近代趣味の床の間図聚』には奇抜なデザインのものも相当に含まれており、皮肉にも、北尾のデザイナーとしての限界を示すものともなっている。以降、自らの創造的提案を主眼に置いた著作は著されず、『近代数寄屋住宅設計資料』のような既存の建築の紹介を主体としたものが、北尾の著作活動の中心となる。

『近代数寄屋住宅設計資料』には、『数寄屋聚成』に見られるような明確な目的に基づく洗練された建物紹介という手法確立前の、試行錯誤の跡を感じることができる。しかしながらそのひとつひとつの小見出しの中は写真、図面、詳細図、スケッチ、コメント文等の項目においては丁寧な方法で紹介がなされており、その後の著作の編集手法のプロトタイプが網羅されている。

d, 後期（昭和30年頃以降）の著作について

錦華寮の完成の後、調査研究を続けていた北尾は、昭和30年頃から再び著作活動を再開する。前期（昭和10年前後）における著作が建物別、あるいは空間構成、空間構成部材別の記述であったのに対して、後期の著述はそれらとは性格を異にするものであった。

そのひとつは材料への執着という点であり、『茶室の材料と構法』（昭和42年）、『銘木大観』（昭和30年）といった著作がそれを代表している。前期における著作においても、建築の空間構成に主眼が置かれ、そこに使用されるものとして、材料の必然的記述があった。しかし後期における著作ではあくまで材料そのものの中に主眼が置かれ、その材料がどのような部材に利用され空間構成に影響を与え、また効果を発揮するかといった視点に立つ記述を行っている。

2つ目の特徴は、自らの数寄屋建築研究の集大成を試みようとしている点である。その成果が『茶室建築』（昭和31年）、『露地・茶庭』（昭和31年）、『数寄屋図解辞典』（昭和34年）であった。『茶室建築』の序において「従来の実例や図録などから一歩進めて、茶室の史的考察及び発達の経路を究め、茶室の各部に対して無視することのできない理論的根拠をもつ法則や、各茶匠好みの系統などを明らかにすることに努めた次第である」と新たな展開を明言している。

この『茶室建築』とその姉妹版と称される『露地・茶庭』とは、基本的にほぼ同様の理念によって編纂されている。そして、この2書の論述方法には、昭和10年前後の茶室建築研究の動向と共鳴するものを見いだすことができる。

単体の建築に、しかも各時代の様式に関する個別の論及のみにとどまっていた建築史界に新風を吹き込んだのは、堀口捨己と沢島英太郎の論文であった。堀口の「茶室の思想的背景とその構成」(昭和7年)には、それまでの論文には見ることでできなかった茶室建築の計画的意図が縦横に論じられ、沢島の「茶室平面発展の史的考察とその系統」(昭和9年)では、建築単体ではない系統的論及がなされ、建築史学に新しい道を切り開いたのである。これらの論文と時期を同じくして前述の『数寄屋聚成』が刊行されており、昭和10年前後は数寄屋建築研究史においてこれ以降の論文の大きな3つの傾向が出揃った時期と見ることができるのである。

こう考えたとき、昭和10年前後にばらばらに示された3つの分析手法、1)思想的背景を述べたもの、2)系統的論及を述べたもの、3)さらに北尾によるカタログ的なもの、これらすべてが『茶室建築』、『露地・茶庭』の中に結実しているのである。さらにこの両書の索引的な意味合いを持って作られたのが『数寄屋図解辞典』(昭和34年)であったといえよう。

#### <注>

- 注1) 本章は拙稿「数寄屋建築家・柏木貨一郎について」(昭和59年10月、日本建築学会大会学術講演梗概集)に加筆訂正を行ったものである。
- 注2) 壽々木雪山「近世名匠傳」『建築工藝叢誌』第II期第15冊大正5年。
- 注3) 内藤昌『近世大工の系譜』ペリかん社
- 注4) 鈴木解雄「江戸幕府小普請方棟梁について」『日本建築学会論文報告集第60号』昭和33年10月
- 注5) 注2)と同じ
- 注6) 『東京国立博物館百年史』東京国立博物館編、昭和48年
- 注7) 蛭川式胤著『奈良の筋道』
- 注8) 『工藝叢談』第1巻、明治13年6月
- 注9) 「柏木貨一郎」『明治雑誌新聞目録』所収
- 注10) 注6)と同じ
- 注11) 山口静一『フェノロサ』上・下、三省堂、1982年
- 注12) 『大茶人益田鈍翁』学藝書院、昭和14年
- 注13) 高橋義雄『近世道具移動史』廣文社、昭和4年
- 注14) 注2)と同じ
- 注15) 1)~7)は「近世名匠傳」より、8)~9)は『近世道具移動史』よりの典拠。
- 注16) 「有楽町集会場表書院ノ間畳廊下拡張ノ件」(大正5年9月29日)の他に数件が発見されている。これらの資料は(株)三井不動産の石田繁之介様よりご提供いただいた。
- 注17) 三井文庫蔵「建築掛第1回報告」明治29年、「建築掛第2回報告」明治30年等による

- 注18) 三井文庫蔵「大西儀八記録」昭和43年12月10日
- 注19) 注2)と同じ
- 注20) 注2)と同じ
- 注21) 注2)と同じ
- 注22) 「茶室一斑」『建築工藝叢誌』第II期第九冊所収
- 注23) 藤井喜三郎著『仲居庵記』昭和55年、私家版。この他に魯堂に関するものとしては白崎秀雄「近世名匠譚 仰木魯堂」(『室内』)、日向進「近代の住宅をつくった建築家たち」(『新住宅』19901-11)などがある。
- 注24) 注23)と同じ
- 注25) 今井平七のご親戚にあられる池田てる子様と荘美知子様より資料の提供を受けました。図面及び資料のリストは別稿としてまとめてある。
- 注26) 『大成建設社史』昭和38年
- 注27) 坂井隆三「藤田傳三郎翁の思出」『其の人を』関西経営者協会編、昭和39年
- 注28) 井上敬太著『淀川邸記』昭和33年2月、私家版
- 注29) 注27)と同じ
- 注30) 北尾の経歴をまとめるに当たってはご息女にあられる蒲田千鶴様のご協力を得ました。
- 注31) 北尾春道著作リスト
- ・前期(昭和10年前後)
    - ・近代趣味の床の間図聚 洪洋社 昭和8年
    - ・近代数寄屋住宅設計資料 洪洋社 昭和9年
    - ・築地本願寺 彰国社 昭和9年
    - ・有楽茶室 有楽会 昭和10年
    - ・数寄屋聚成 洪洋社
      - 1. 数寄屋史図聚 (東山・桃山時代) 昭和10年
      - 2. 同上 (徳川時代前期) 昭和10年
      - 3. 同上 (徳川時代後期) 昭和11年
      - 4. 同上 (明治・大正時代) 昭和11年
      - 5. 数寄屋名席聚 (各流茶祖好) 昭和11年
      - 6. 同上 (武人文人好) 昭和10年
      - 7. 同上 (各流茶匠好) 昭和11年
      - 8. 数寄屋名園聚 (茶庭・灯籠) 昭和11年
      - 9. 同上 (茶庭局部) 昭和10年
      - 10. 同上 (躰い・手水鉢) 昭和10年
      - 11. 現代数寄屋聚(茶室・数寄屋風書院) 昭和10年
      - 12. 同上 (同上) 昭和12年
      - 13. 同上 (同上) 昭和11年
      - 14. 数寄屋住宅聚 (歴史図録) 昭和10年
      - 15. 現代数寄屋住宅聚 昭和11年
      - 16. 同上 昭和11年
      - 17. 数寄屋建築構造聚 (外観構成) 昭和11年
      - 18. 同上 (窓・開口) 昭和11年
      - 19. 同上 (室内構成) 昭和10年
      - 20. 同上 (統室内構成) 昭和12年
  - ・国宝書院図聚 洪洋社 大熊喜邦監修
    - 1. 靈雲院書院・光浄院書院・勸智院書院 昭和13年
    - 2. 勸學院客殿・圓滿院宸殿・大通寺書院 昭和13年
    - 3. 本願寺書院 昭和13年
    - 4. 観音寺書院・妙法寺大書院・勸修寺書院 昭和13年
    - 5. 妙喜庵書院・西教寺客殿・曼殊院書院 昭和13年
    - 6. 大覚寺正寢殿・南禅寺方丈 昭和13年
    - 7. 吉水神社書院・中ノ坊書院・今西家書院・西米寺奥殿 昭和13年
    - 8. 大仙院方丈・正傳寺方丈・金地院方丈 昭和14年
    - 9. 本願寺飛雲閣・本願寺黒書院 昭和14年
    - 10. 鹿苑寺金閣・慈照寺東求堂 昭和14年
  - ・後期(昭和30年頃以降)
    - ・数寄屋住宅図聚 彰国社 昭和27年
    - ・銘木大観 洪洋社 昭和30年

・茶室建築	彰国社	昭和31年
・露地・茶庭	彰国社	昭和31年
・書院建築詳細図譜	彰国社	昭和31年
・建築文庫17 数寄屋の材料と構法(1)	彰国社	昭和32年
・石の造形	彰国社	昭和33年
・数寄屋図解辞典	彰国社	昭和34年
・日本建築案内(国宝・重要文化財)	彰国社	
1. 関東・東北・北海道		昭和38年
2. 関東		昭和37年
3. 京都の古建築		昭和39年
4. 奈良(上)		昭和37年
5. 奈良(下)		昭和37年
・茶室の材料と構法	彰国社	昭和42年
・茶室の展開図	光村推古書院	昭和45年

〈研究組織〉 日本大学理工学部・建築史研究室

主査 近江 栄 日本大学理工学部教授

委員 大川三雄 日本大学理工学部助手

〃 向後慶太 日本大学理工学部大学院生